

知床沼の野営禁止に関する提案

羅臼山岳会

1. 提案の具体的な内容

「知床半島先端部利用の心得」において、アブラコ湾を除く知床岬地区、ルシヤ地域及び知床沼周辺では、植生保護やヒグマ対策の観点から野営禁止とされている。

このうち、知床沼については、知床岳等を目指す登山者のテントサイトとして、一部の箇所限り野営禁止区域から外していただきたい。

知床沼は以前から知床岳登山のベースキャンプ地として利用されており、無雪期に知床岳を登山するためには知床沼に野営せざるを得ない現状にある。

知床沼に次ぐ野営適地とされる「青沼」から知床岳を往復する場合、12時間ほどの行程となる。また、登山道が整備されていなことから道に迷いやすく、下山時に迷った場合には陽のあるうちに青沼のテントサイトに帰着することはかなり困難となることから今後、事故や遭難などが起きる可能性が高い。

知床沼周辺の植生は湿原で大変脆弱だが、北沼付近にはササやイネ科草本が生息する草地があり、数張のテント設営が可能と思われる。この草地のみを野営禁止区域から外すとともにロープ等の設置により箇所を明示し、テントサイトとして活用することを提案する。

添付資料 <参考文献>

知床沼における登山道の整備、管理に関する 2005 年度調査
専修大学北海道短期大学園芸緑地化 石川 幸男教授

2. 戦略の基本原則との対応

- ①「利用の心得」が公布されたのちも知床沼で野営する登山者が後を絶たない状況にあり、知床沼周辺の植生への影響が懸念される。本提案により草地をテントサイトとして明示することにより、湿原植生へのダメージを軽減することができる。
- ②知床沼の北沼付近草地での野営が可能となることで、知床岳への安全な登山が可能となり事故や遭難などが防止できる。また、より良質な原生の自然体験の提供に繋がる。
- ③知床沼は以前から知床岳登山や知床半島縦走の際のベースキャンプとして使用されており、知床山域におけるバックカントリー登山の文化継承として必要である。

3. 個別部会の想定メンバー

釧路自然環境事務所、根釧東部森林管理署、斜里町、羅臼町、知床エコツーリズム推進協議会、羅臼町・知床世界自然遺産協議会、知床ガイド協議会、斜里山岳会、羅臼山岳会

知床沼の野営禁止によって生じた諸問題とその解決に向けた提案

羅臼山岳会・斜里山岳会

1. 提案の具体的な内容

「知床半島先端部利用の心得」において、アブラコ湾を除く知床岬地区、ルシャ地域及び知床沼周辺では、植生保護やヒグマ対策の観点から野営禁止とされています。

このうち、知床沼については、知床岳等を目指す登山者のテントサイトとして、一部の箇所限り野営禁止区域から外していただきたい。知床沼は以前から知床岳登山のベースキャンプ地として利用されており、無雪期に知床岳を登山するためには知床沼に野営せざるを得ない現状にあります。

知床沼に次ぐ野営適地とされる「青沼」から知床岳を往復する場合、通常14時間ほどの行程となりますが不明瞭な刈り分け道しかないことからルートを迷いやすく、陽のあるうちに青沼のテントサイトに帰着することはかなり困難となっています。このことにより今後、長時間行動による人身事故など山岳遭難が起きる可能性が高いと思われます。

また、近年は青沼以外の場所にテントを張るパーティーも見受けられ、知床沼周辺と同様の植生が野営により破壊されることが懸念されています。今後も知床沼周辺の野営禁止が続くことにより他の場所がテントサイトとして利用され貴重な植物群落の破壊が拡大されることとなります。

知床沼の周辺は湿原で植生は大変脆弱ですが、北沼付近の一部にササやイネ科草本の草地があり、数張のテント設営が可能と思われます。この草地のみを野営禁止区域から外し、ロープ等の設置により野営箇所を明示し、テントサイトとして活用することを提案するものです。

● <参考文献> 添付資料-1

知床沼における登山道の整備、管理に関する2005年度調査

専修大学北海道短期大学園芸緑地科 石川 幸男教授

(現 弘前大学教授 白神自然環境研究所)

2. 戦略の基本原則との対応

- ①「利用の心得」が公布されたのちも知床沼で野営する登山者が後を絶たない状況にあり、知床沼周辺の植生への影響が懸念される。本提案により草地をテントサイトとして明示することにより、湿原植生へのダメージを軽減することができる。
- ②知床沼の北沼付近草地での野営が可能となることで、知床岳への安全な登山が可能となり事故や遭難などが防止できる。また、より良質な原生の自然体験の提供につながる。
- ③知床沼は以前から知床岳登山や知床半島縦走の際のベースキャンプとして使用されており、知床山域におけるバックカントリー登山の文化継承として必要である。

3. 個別部会の想定メンバー

釧路自然環境事務所、根釧東部森林管理署、斜里町、羅臼町、知床ガイド協議会、斜里山岳会、羅臼山岳会

<資料-1> 知床沼周辺図

野営禁止解除候補地

写真提供：環境省羅臼保護官事務所（2011.8.29 撮影）



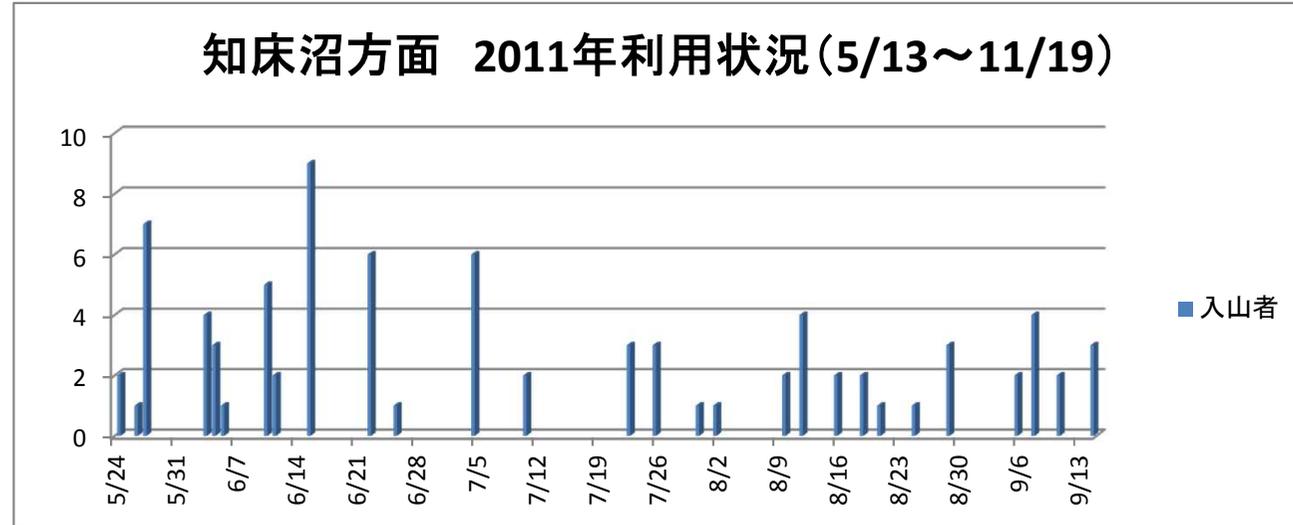
コースタイム
青沼⇒知床沼 3 時間 知床沼⇒知床岳 4 時間

<資料-2> 知床沼方面の利用状況

<資料提供:環境省自然保護官事務所>

2011年 利用状況 (5月13日~11月19日)

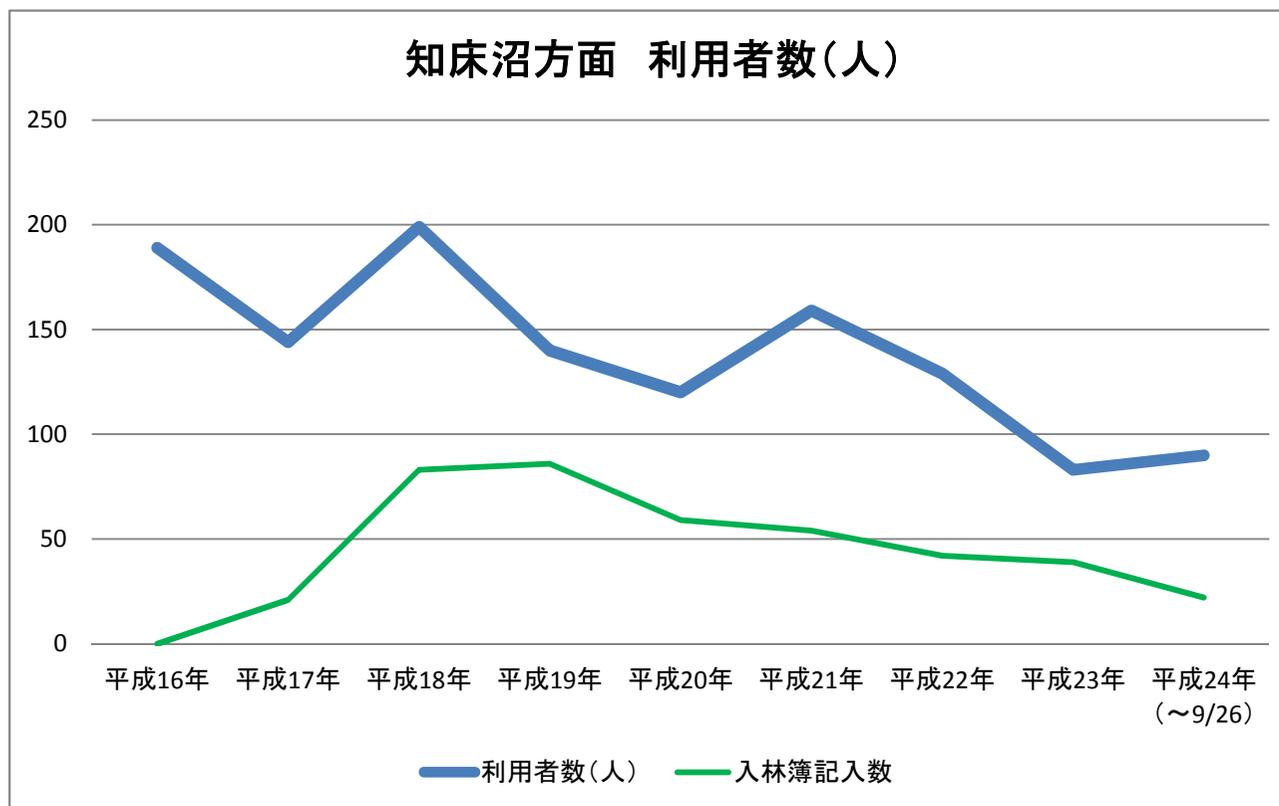
曜日	月日	入山者
火	5/24	2
木	5/26	1
金	5/27	7
金	6/3	4
土	6/4	3
日	6/5	1
金	6/10	5
土	6/11	2
水	6/15	9
水	6/22	6
土	6/25	1
月	7/4	6
日	7/10	2
金	7/22	3
月	7/25	3
土	7/30	1
月	8/1	1
火	8/9	2
木	8/11	4
月	8/15	2
木	8/18	2
土	8/20	1
水	8/24	1
日	8/28	3
月	9/5	2
水	9/7	4
土	9/10	2
水	9/14	3
	合計	83



知床沼方面の年度別利用者

<資料提供:環境省自然保護官事務所>

年 度	利用者数(人)	入林簿記入数	
2004 平成16年	189		
2005 平成17年	144	21	6/3~11/11
2006 平成18年	199	83	6/1~11/21
2007 平成19年	140	86	5/31~11/7(10/11~11/7ND)
2008 平成20年	120	59	5/13~11/27
2009 平成21年	159	54	5/14~11/4
2010 平成22年	129	42	5/10~11/5
2011 平成23年	83	39	5/12~11/4
2012 平成24年 (~9/26)	90	22	5/9~



知床沼における登山道等の整備、管理等に関する 2005 年度調査報告

石川幸男

専修大学北海道短期大学園芸緑地科

1 はじめに

知床岳(1254m)は、国土地理院 25,000 分の 1 地形図によれば知床半島において標高では第 12 位となる山岳であり、決して突出して高いわけではない。しかし、公式の登山道が整備されている中央部の羅臼岳と硫黄山間のいわゆる知床連山と、半島基部の斜里岳を除けば、もっとも知名度の高い山岳といえる。これは、半島中部のルシャ川・ルサ川狭窄部より先端部側での最高峰であり、名称自体が半島と同名であることから、登山者の憧れを喚起することの表れといえるであろう。事実、近年には非公式のルート(以下、踏み跡)ができており、利用者の増加とそれに伴う種々の環境上の問題が懸念されていた。

2005 年 8 月、知床岳にいたる踏み跡の現状を視察して利用実態を把握し、特に、途上でキャンプ適地とされる知床沼までの状況を把握して、利用と諸規制のあり方を検討するための植物、および植生の基礎資料を得るための調査を行った。すなわち、知床岳登山の入山口となる羅臼側ウナキベツ川河口より知床沼にいたるまでの踏み跡と、知床沼のキャンプ地の状況を確認するとともに、沼においてテントが設営されている部分で若干の植生調査を行った。また、現地調査に加えて 2004 年に撮影された知床半島全域の航空写真も用いて、知床沼周辺の植生と踏み跡の分布を把握した。本報ではそれらの調査結果を述べるとともに、今後植生の状況を監視するためのモニタリングサイトの候補地を述べる。さらに、植生保護の観点から、キャンプ指定地と登山道の改善項目、今後の調査課題に関する提言を行う。

なお、今回の調査に際しては、北海道大学総合博物館の高橋英樹教授、環境省羅臼自然保護官事務所の岸秀蔵自然保護官、知床博物館の内田暁友学芸員、および知床財団松林良太氏に同行いただいたとともに、高橋、内田両氏には、植生調査にご協力いただいた。航空写真の入手と判読結果の取りまとめに際しては、酪農学園大学環境システム学部助教授、および EnVision 環境保全事務所理事長の金子正美氏と同事務所の吉村暢彦氏にご協力いただいた。さらに、北海学園大学工学部の佐藤謙教授からは、1980 年代初頭に北海道によって行われた自然環境総合調査の際に、現地で調査した状況をご教示いただいた。以上の方々をここに記して、謝意を表する次第である。

2 調査地と行程

知床沼、および知床岳に至る登山道は公式には認められていないものの、踏み跡が存在している。現地調査は 2005 年 8 月 6 日と 7 日の 2 日間の行程で行われた。初日はウナキベツ川の河口

から、西向きに本流沿いに進み、ウナキベツ川左沢の崩壊地を巻くようにしてハイマツ帯（以下、下のハイマツ帯）に到達し、さらに知床沼の北側の沼（以下、北沼）の北岸に達した（図-1）。今回の調査においては、知床沼北沼以前の各所においては、周辺の植物群落の概要を把握するにとどめた。一方、知床沼においては、翌7日に方形区を設置し、キャンプ地として利用されている部分の植生の状況を把握した。その後、登山時と同じルートをたどって下山した。

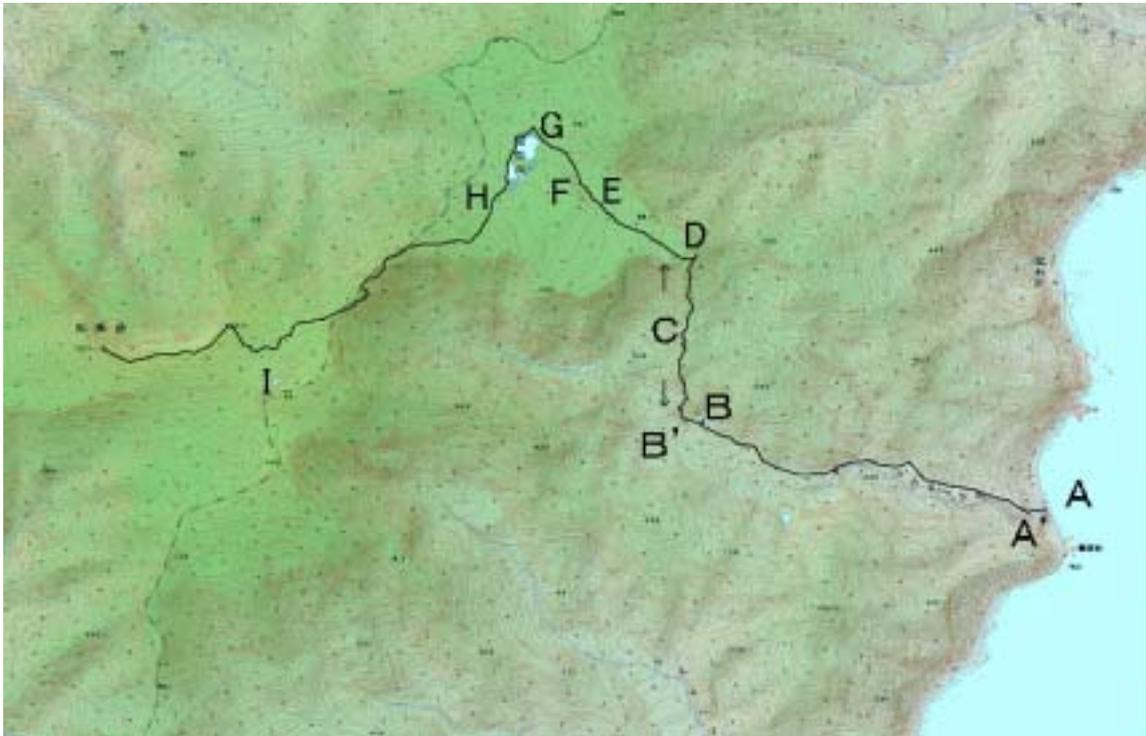


図-1 調査経路図（地図はカシミール3Dソフトから引用した）

3 結果

3-1 知床沼以前の踏み跡、ならびに周辺の状況

ウナキベツ川河口（A）から本流沿いに西北西に向かって踏み跡は伸びている。歩行開始直後の、ウナキベツ川河口近くで尾根に取り付く部分（A'）は、いきなり尾根に直登することから傾斜が著しくきつく、すでに植生が破壊されて表土が裸出していた。この部分はジグザグの進行に付け替えるなどの対策を施し、植生への被害がこれ以上拡大することを防ぐとともに、登山者の安全を確保することが必要と思われる。その後踏み跡は、標



写真-1 ウナキベツ川沿い（A～B間）における踏み跡の状況。

高約 400m の沼 (B) に至るまではいずれも若齢のオノエヤナギ林、ケヤマハンノキ林、ミヤマハンノキ林や針広混交林の中を進み (写真-1) 特段に踏み跡の崩壊、植物群落の破壊、外来種の顕著な侵入等は認められなかった。

標高約 400m 近くには、ウナキベツ川左沢の崩壊地の上部から供給されたと考えられる巨礫が破碎され、鋭利な割れ目が目立つ岩の折り重なる大崩があり、水場も得られる。これを過ぎると踏み跡は急激な勾配 (B') を登った直後に右に折れて、知床沼の乗るハイマツ台地目指して、左沢の崩壊地の縁の急登に入る。標高差約 430m を一気に登るこの部分 (C) は、崩壊地の縁上部ぎりぎりを登ることから (写真-2) 崩落に伴う植生の破壊と登山者の事故が懸念される。標高 830m で下のハイマツ帯の台地の縁 (D) に到達した後は、ハイマツが切り開かれた踏み跡を北西に進み、途中で小規模の雪田 (F; 写真-3) を通過するが、ここでは消雪時期に応じて利用者がぬかるみを避けて歩くことから、複数の踏み跡が形成されており、連山登山道に関する昨年度の報告 (石川ほか 2005) で記述したのと同じ状況になっていた。その後、程なく知床沼の北沼の北岸 (G) に到着する。D ~ G間のハイマツ群落中の踏み跡では、ハイマツの直径 10 cm をこえる匍匐幹がノコギリで切り落とされて踏み跡が作られており、かなり大規模な作業を要したと推察される。なお、地点 E と H は第 5 章で言及する。

3-2 知床沼におけるキャンプ利用実態

知床沼北沼の北岸においては、調査に訪れた 8 月 6 日に、われわれを除い



写真-2 ウナキベツ川左沢崩壊地 (C) における踏み跡の状況。赤い破線が踏み跡で、連続しない部分は写真では見えないことを意味する。



写真-3 下のハイマツ帯中の小規模雪田 (F) における複雑化した踏み跡の状況。



写真-4 知床沼北沼の北岸の状況。右のテントの右にさらに1張りのテントが設営された。

て合計 6 張り (17 名) のテントが設営されていた (写真-4)。ここは、佐藤 (1981) に記録されている植生調査から判断すると、ミネハリイやミスゴケ類が生育する規模の大きい湿原に相当する。現地での視察によれば、登山者はテントを設営する際に沼の岸を離れ、周辺のハイマツ帯近くに設置する傾向が見られたが、その一部はミネハリイやミスゴケ類の生育する上にも設営されていたとともに、沼の西岸を中心に、上記の種を踏んでいる踏み跡が延びていた (写真-4 の踏み跡参照)。この踏み跡は、北沼と南側の沼 (以下、南沼) の間、および南沼以降において小規模な湿地の間を縫うように延び、沼の南西側のハイマツ帯 (以下、上のハイマツ帯) に達していた。なお、現地において登山者から聞いた話では、数年前から世界自然遺産指定前の駆け込み的な登山が増大し、急激に立ち入る者が増えたという。

3 - 3 知床沼のテントサイトにおける植生

われわれがテントを設営した場所を含めて、北沼北岸の縁 (図-1 の G 地点、図-2 も参照) において、テントの設置されていた場所 3 ヶ所の植生調査を実施した。方形区 1 と 2 は登山者が利用していたテントサイト、方形区 3 はわれわれのテントサイトである。

表-1 知床沼の北沼北岸におけるキャンプ地の植生

方形区番号	1	2	3	
面積 (m ²)	1	1	1	
標高 (m)	920	920	920	
調査月日	Aug. 07	Aug. 07	Aug. 07	
出現種数	13	15	11	
植被率 (%)	75	85	90	
<i>Sanguisorba tenuifolia</i>	1	1	3	ナガホシロハレモク
<i>Scirpus caespitosus</i>	4	5		ミネハリイ
<i>Geum pentapetalum</i>	1	1		チンゲル
<i>Bryanthus gmelinii</i>	1	+		チンツガザクラ
<i>Loiseleuria procumbens</i>	1	2		ミネウチ
<i>Drosera rotundifolia</i>	+	2		モウセンゴケ
<i>Andromeda polifolia</i>	+	+		ヒメジャコウ
<i>Vaccinium uliginosum</i>	+	+		クロマメ
<i>Tofieldia okuboii</i>	1			ヒメウシヨウブ
<i>Sphagnum papillosum</i>	1			体ミスゴケ
<i>Pinus pumila</i>	+			ハイマツ
Moss sp.	+		1	コケの 1 種
<i>Vaccinium vitis-idaea</i> var. <i>minus</i>	+		+	コケモ
<i>Empetrum nigrum</i> var. <i>japonicum</i>		+		ガンコウラン
<i>Lycopodium obscurum</i>		+		マンネスキ
<i>Trientalis europaea</i> var. <i>arctica</i>		+		ゴツマトリウ
<i>Hosta rectifolia</i>		+		ウチキボウシ
<i>Carex</i> sp.1		+		スゲ属の種 1
<i>Coptis trifolia</i>		+	1	ミツバオレン
Gramineae sp.		+	+	イネ sp.
<i>Agrostis flaccida</i>			3	ミヤマカハ
<i>Carex</i> sp.2			2	スゲ属の種 2
<i>Tilingia ajanensis</i>			+	シラネニジン
<i>Allium victorialis</i> var. <i>platyphyllum</i>			+	ギョウジヤニク
<i>Parnassia palustris</i>			+	ウバチウ
<i>Spiraea betulifolia</i> var. <i>aemiliana</i>			+	エゾマルバシモツ

調査された3方形区は隣接しているにも関わらず、3ヶ所に共通する種はナガボノシロワレモコウ1種のみであった。方形区1と2に共通する種はミネハリイ以下7種、方形区1と3、および方形区2と3では、ともに2種であり、方形区1と2の共通性が比較的高かった。方形区1と2ではミネハリイが優占しており、テント設営の影響を受けて、地上部が倒伏している株が多かった。方形区3ではナガボノシロワレモコウとミヤマヌカボがほぼ同じ程度に多かった。

3-4 知床沼周辺の暫定的な現存植生図と踏み跡分布

上記3-3)に記した現地で確認された植生と、環境省によって一昨年、2004年に撮影されたカラー航空写真とを照合することによって暫定的な植生図を作成した。同様に現地での確認と航空写真上での分布状況から、踏み跡の分布も明らかにした。航空写真そのものと踏み跡を図-2に、また植生図を図-3に示した。用いた写真は、40cm解像度として公開されている画像の原フィルムを再スキャンして、解像度を20cmに上げたものである。

図-2に示したように、踏み跡はウナキベツ川方面から下のハイマツ台地を通ってきたルートが、図の右下方から北沼北岸に至ることが明瞭に見られる。一部に連続しない部分があるのは、航空写真上の画像で確認できなかったことを意味する。北沼の北岸で踏み跡は写真右上と左方向に分岐し、前者は知床岬に至る踏み跡であり、後者が知床岳にいたる踏み跡である。後者は、北沼北岸のもっとも規模の大きい湿原上を左下方に進み、北沼および南沼の西岸の小規模湿原を縫うようにいくつかのルートに分かれながら分岐合流を繰り返す、最終的には図の左下方から上のハイマツ帯を経由して知床岳に向かう。なお、これらの踏み跡上にはシカの足跡も認められたことから、一部はシカ道の可能性もある。しかし、何ヶ所かには蛍光ピンク色の標識テープが設置されていたことから、ほとんどの部分は知床岳に向かうルートと考えられる。

また、図の中央からさらに左方に伸びる踏み跡らしき痕跡が明瞭に認められるものの、この方面に向かうルートは著者の知る限りでは存在しない。今後の確認が必要である。

航空写真をもとに植生を判別するに際しては、おもに色調の違いを重視して判読した。知床沼においては、周辺を緑色のハイマツ群落が囲んでおり、それと沼の水面の間に、湿地が分布している。航空写真によれば、方形区1と2が位置する部分が含まれる色調の茶色の湿地のほかに、その周辺、あるいはハイマツ群落の辺縁にやや色調の白い、あるいは緑がかった部分が認められた。方形区3は色調の白い部分に設定されたものである。方形区1と2は、佐藤(1981)にも記載されている、知床沼北沼北岸の大規模湿原の組成と共通性が高い。一方の方形区3では、湿地要素がやや少なくなっていた。方形区が数少ないことから、色調の白い、あるいは緑がかった部分の全てが方形区3と組成が類似しているとは断言はできないものの、ここでは色調の違いを重視して両者を暫定的に別の凡例として区分した。どちらの凡例にも異なる要素が混在している可能性があり、特に色調の緑に強い部分は、ササ類が混生している可能性が考えられる。

また、植生図の周辺には空白のままの植生区分が記されているが、これは、今回の短い調査では探索しなかったために詳細が不明な群落である。立地条件に加えて、相観的に丈の高い植物が生育していることが認められる部分が多く、なおかつ落葉していると思われることから、ダケカンバ、ミヤマハンノキ、あるいは高山性のナナカマド類(ウラジロナナカマドとタカネナナカマド)の群落である部分が多いと推察される。樹幹の白く見えている部分はダケカンバであろう。



図-2 知床沼の航空写真と踏み跡．黒丸は植生調査を実施した部分を示す．

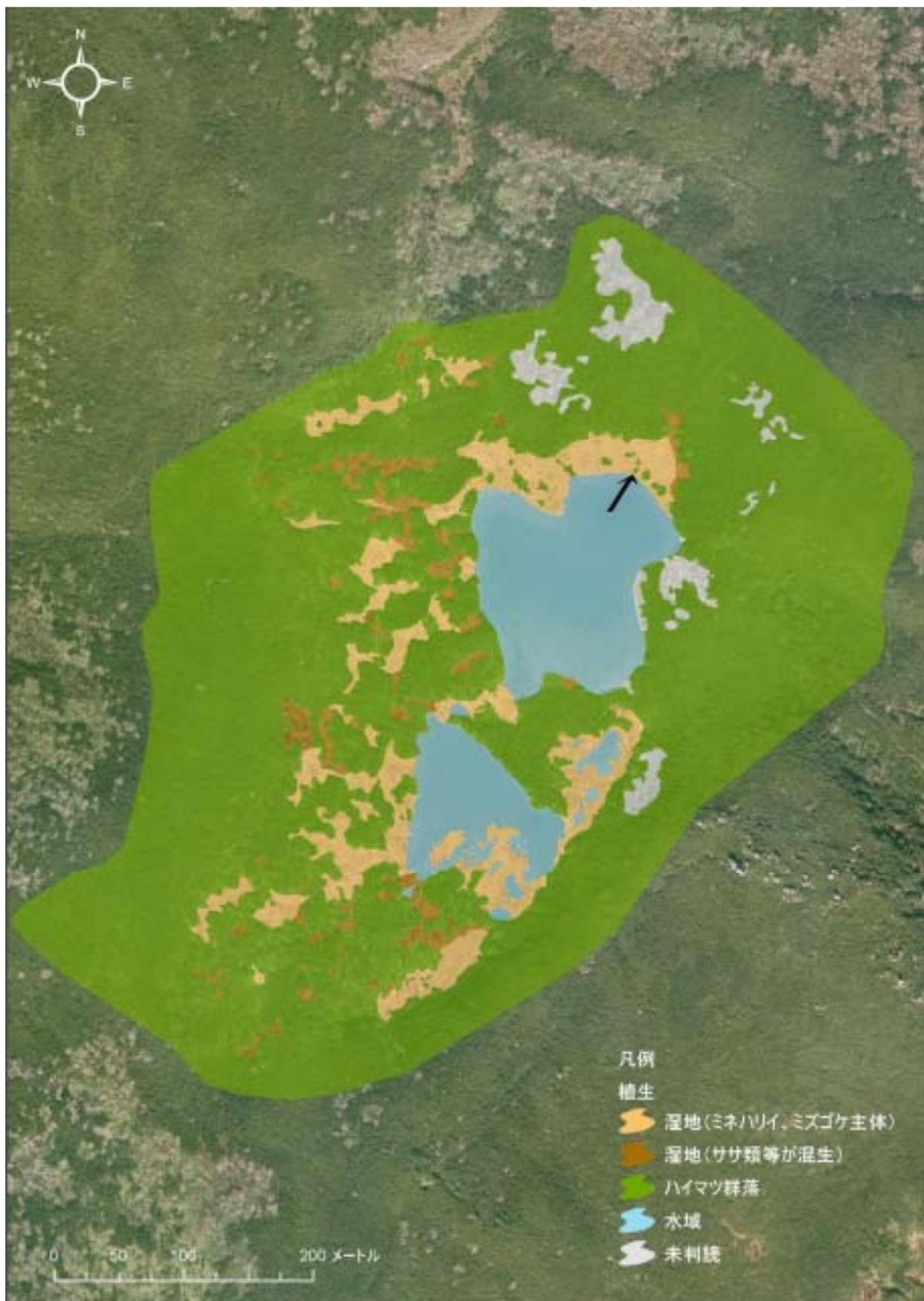


図-3 知床沼の植生図．各凡例の内容は暫定的なもので、今後の確認を要す．図中の矢印は、写真-4の左に

映っているハイマツ群落を示す。

さらに現状認識のために次の点を付記する。今年の調査の際に現地でテントを設営していた愛知県からのグループは、ルシャルサ越えをやり遂げた後、ウナキベツ川経由で知床沼を過ぎ、知床岳に向かう踏み跡上の 1182m 峰の南西に位置する小規模湿地（図-1 の地点 I）で前日のテントを設営し、翌 8 月 6 日に知床岳に登頂したのちに、知床沼泊でわれわれと合流したという。彼らのリーダーの話によれば、1182m 峰南西の湿地がテント設営適地であることはすでに自明の状況らしいとのことであった。

このように、現実に登山者は知床沼、知床岳周辺にかなり入り込んでいるといえる。したがって、世界自然遺産にふさわしい自然の良好な状況を維持するためには、以下に記した植物と植物群落保護のための実効的な対策を実行することが不可欠である。

4 モニタリングに関する提言

4 - 1 モニタリングサイト

以上の結果を元に、ウナキベツ河口から知床沼の踏み跡上において、植生変化に対する監視を行う必要がある地点は以下のように考えられる。

- A' : ウナキベツ川河口近くの尾根取り付き地点
- C : ウナキベツ川左沢の崩壊地縁を通る地点
- F : 下のハイマツ帯における小規模雪田
- G~H : 知床沼周囲の踏み跡分布域

このうち、地点 A' は極端な急斜面を攀じ登っていることから、以下の第 5 章で述べるような公式の登山道化を実現できれば、必然的に折り返しをつけて緩斜面化をするなどの対策が取られることになる。その付け替えが行われれば、もともとは低地の一般的な二次的な森林内であり、希少種等も少ないと考えられるので、モニタリングサイトとしての優先度は低い。一方、地点 C は崩壊地であり植生の大規模な変化が懸念されることから、モニタリングの体制が必要といえる。また地点 F と G~H は、公式な登山道としての整備に伴って立ち入り制限が実施されれば植生の回復が期待されるが、その回復過程を知ることも含め、早い段階からのモニタリングが必要である。さらに、沼を過ぎて上のハイマツ帯より先におけるモニタリングサイトに関しては、今回の視察では訪れていないことから、別途、調査が必要である。

4 - 2 航空写真を用いた広範囲の定期的なモニタリング

今回の現地調査によって、知床沼周辺においては予想以上に踏み跡が多いことが判明した。沼周辺全体の状況に関しては、解像度を 20cm 程度までに上昇させた航空写真によって、踏み跡が錯綜していることが明瞭に確認できた。植生区分においては、現時点では現地調査が不足しており組成の内容などは暫定的な区分とは言わざるを得ないが、同じ写真によって一辺が数 m 程度の面

積的に小さな部分まで判別可能であった。図-3の矢印は写真-4の左側の映っているハイマツ群落を示しており、このハイマツ群落の広がりからも、小規模のパッチ状の植分が識別可能であることが理解できるであろう。以上から、ここで用いたような解像度の写真によって植生と踏み跡を監視すれば、知床沼における両者の今後の変化を詳しく明らかにできると期待できる。したがって、この場所の今後の保全に極めて有効といえ、定期的な撮影が望まれる。

また、今回と同様の写真の判読は、知床沼以外においても、知床半島内において自然性が高いと同時に利用者が集中している、あるいは今後集中すると考えられる他の重要な場所における種々の変化の監視にも有効と期待できる。これらの場所としては、知床連山登山道周辺が第一の候補であり、さらに羅臼湖と知床岬も候補であろう。植生の監視は、現地での組成調査その他の詳細なデータが必要であることは言うまでもないが、知床半島のように自然性の高いがゆえにアクセス困難な場所が多い地域においては、現地調査に必要な時間と労力が確保できないことも多い。特に、広範囲の現地の状況を経時的に把握することは困難を極める場合が多い。ここで試行的に示したような高解像度の写真による監視は、現地踏査や植生データによる確認と併用することによって、広範囲の現地の状況を把握する面で極めて有効と考えられ、それゆえ、世界自然遺産としての質を維持する面において、大きな効果が期待できる。

4 - 3) 知床沼の植生の実態解明

知床沼の植生に関する今回の調査は、わずか3カ所の方形区を設定したに過ぎないことから、現状把握として到底十分なものとはいえない。これに対して佐藤(1981)は北沼の北岸、西岸において合計30カ所の方形区をベルト状に設定して、詳しい記載を行っている。しかし、それでも北沼の対岸と南沼周辺はまったくの未確認である。航空写真で見ると、北沼と南沼の東岸には、全体に茶色であることからミネハリイとミズゴケ類主体の湿地の凡例に分類されたものの、今回の植生調査を実施した北沼北岸よりは明らかに茶色が濃い部分が見られ、今回に調査された植生とは異なる可能性がある。

佐藤(1981)によれば、連山二つ池と知床沼においては、ミネハリイ、イボミズゴケ、ワタスゲなどのような通常の高山湿原の要素の種に加えて、チシマツガザクラ、ミネズオウなどの風衝地の要素が混生することが、これらの湿原の日本の高山湿原における特異性といえる。しかし、知床沼におけるその実態は完全には記載されていない。また、沼の周辺において、ダケカンバ、ミヤマハンノキ、あるいは高山性のナナカマド類からなるとされる亜高山性の落葉広葉樹林の植分でも調査は行われていない。こうした調査は、利用によって自然の質が低下させられることを監視するという意味以前に、世界自然遺産としての実態解明そのものの面から、必要不可欠である。したがって、知床沼とその周辺の植生の内容に関しては、基礎的、かつ網羅的な植生調査が必要である。

5 キャンプ地利用と登山道に関する提言

第3章に詳しく記した状況を鑑み、踏み跡の付け替えとキャンプ指定地については次の提言を

する。現時点で、踏み跡は図-1に黒線で示したように下のハイマツ帯から知床沼の北、および西岸をとおり、上のハイマツ帯に戻って、知床岳前峰である1243m峰に達する。第一に、現状の踏み跡を登山道として公認し、明確なルートを設定して整備を行うことを提言する。知床半島全域を考えた場合、知床連山に次ぐスケールをもつ、あるいはこれを凌駕する原始性をもつ山岳は知床岳において他にない。したがって、連山の縦走を体験した登山者が次の目標として知床沼～知床岳を目指すのはきわめて必然的な欲求と言える。ところが現状では非公式に登山されていることになり、ここで問題としている植生の保護保全のみならず、ルート全体の安全性の確保も図りにくい状況下にある。そこで、踏み跡を公式に登山道として認知することをまず提言する。

その際さらに、知床沼周辺の植生が、知床半島全域でもっとも規模の大きい湿原であることを勘案して、その保護保全を期すために、踏み跡を図1に赤で示したような最短距離のハイマツ帯中の登山道(EとHの間)に付け替える一方、Eから先の踏み跡は立ち入りを認めず、知床沼への立ち入りは極力行わせないようにすることが不可欠と考える。

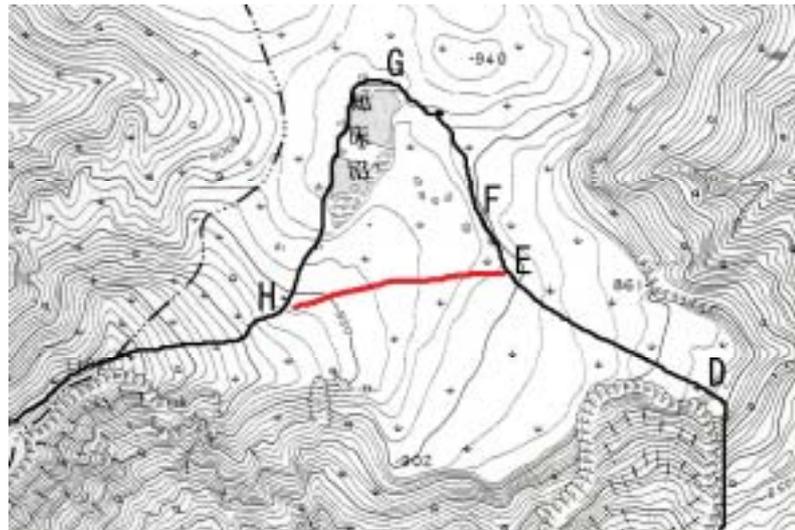


図-4 知床沼周辺の踏み跡(黒線)と、付け替え案(赤線)の概念図

第二に、キャンプ地として沼岸を利用するか否かに関しては、以下のように場合に応じて2つの案を提言する。第一案としては、上に提言した付け替え後の登山道のみを利用することによって北沼北岸を含めて沼周辺は一切キャンプ地に指定せず、より下方のウナキベツ川河畔、標高約400mの沼近辺などを指定地として、ここから知床沼～知床岳の日帰り登山のみ、認める方法がある。時間的には、400mの沼周辺からの日帰りの登山は可能と思われる。この方法によれば、登山道は下のハイマツ帯からEに至り、さらにHに直行する最短距離をたどり、その後、上のハイマツ帯から知床岳に至る。したがって、沼への立ち入りは完全にシャットアウトされ、その原始性はこれ以上損なわれることなく現状を維持し、植生は回復の方向に進むと考えられる。この方法が、植物と植物群落の自然性を保つ最善の策であることは、いうまでもない。

しかし、知床世界自然遺産を訪れる人々の多様な体験を重視し、その中でもっとも質の高い体験のひとつとして、原始性の高い知床沼でのキャンプを認めるのであれば、次の第二案以外の方法はない。すなわち、現状でキャンプ地として利用されている北沼の北岸において、ミネハリイ、ミズゴケ等が生育していないハイマツ帯に接した北端部分に数張りのテント設営が可能であることから、知床沼ではこの部分のみをキャンプ指定地とする(図-2 黒丸部分のハイマツ群落側)。ただしこの場合は、知床沼～知床岳全域を対象に入山者を管理・規制するのみならず、この場所でキャンプする人数も厳密に管理することが前提となる。この場所でテントを設営した場合、沼の湿原植生に対する影響を可能な限り小さくできる場所はきわめて小規模であることから、登山シ

ーズン中には毎日、この場所にテントを設営する登山者を指定するとともに設営位置も明示することに加え、それ以外の登山者を立ち入らせない体制が不可欠になる。このことは、入山を完全に事前の登録制にすることを意味する。さらにこの場合は、知床沼への登山道は、例外的にEから現在の北沼北岸(G)までは整備するものの、植生保全の観点から、それより先の南沼方面には決して立ち入らせないことが必須条件である。地点Gより南への立ち入りは、たとえどのような形であれ、沼の湿原植生に影響を与える。また、途中の小規模雪田(F)ではすでに踏み跡の複線化が始まっており、若干の荒廃が生じているので、ここも通過しないようにハイマツ帯中に付け替えが必要である。なお、この第二案をとる場であっても、登山者のし尿の問題等も考慮する必要があり、知床沼の水質が悪化する傾向が認められた場合などには、沼でのキャンプの見直しも含め、柔軟、かつ迅速な対応が必要である。

以上のように、知床沼における登山者による植生の被害を軽減し、その保護、回復を図るためには、周辺のハイマツ帯の伐開が不可避である。この点は、昨年度に報告した知床連山二つ池における状況(石川ほか 2005)とまったく同様である。ハイマツ帯を新たに伐開することには合意形成などの面で種々の困難さも予想されるが、昨年度の報告でも詳細に報じたように、ハイマツ帯には希少植物はほとんど生育しない。また、知床半島の高山帯ではハイマツ帯が広大に広がる一方、湿原、雪田や風衝地の植生はその分布が限られ、あたかもハイマツ帯の海に浮かぶ島のような様相を呈している。世界自然遺産に登録された知床半島の高山帯の生物多様性を維持し、希少種を保護するためには、これら島状の植生の維持、保護管理が不可欠である。このため、ここで述べた提言を関係諸機関が協同して実現するよう、強く要望する。

文献

- 石川幸男・佐藤 謙・内田暁友 (2005) 資料-2 知床連山における登山道・キャンプ地周辺の植生荒廃に関する2004年度調査報告書・平成16年度知床国立公園適正利用検討調査報告書・環境省自然保護局東北海道自然保護事務所。
- 佐藤 謙 (1981) 第 章 高山植生・p123 149・知床半島自然生態系総合調査報告書(総説・植物篇)・北海道。



写真-4 方形区1の状況(2005年8月7日)



写真-5 方形区2の状況(2005年8月7日)



写真-6 方形区3の状況(2005年8月7日)